

〈資料〉楽理科卒業論文題目一覧

【昭和二十八年年度】

- 小川 静枝 音楽における Stimmung の意義について
 小野崎孝輔 ジャズの歴史、演奏家および編曲法について
 酒井保子 民謡が芸術歌曲に及ぼしたる影響について
 佐治真弓 ピアノ協奏曲の一断面 ―モーツァルトの戴冠式とベートーヴェンの第一番との両ピアノ協奏曲の比較研究―
 佐野和彦 印度音楽楽律論 ―22 Srutis の発生について―
 武田敬子 リヒャルト・ワーグナーの音楽観について
 千蔵八郎 ヴェルディにおける歌劇様式の特質
 中野俊也 Richard Wagner 作 トリスタンとイゾルデの研究
 永田滋子 ウェーバーのフライシュッツについて
 羽牟玲子 Musical Notation
 福長みのり 古代人のオルガン
 布施容子 マーラーの歌曲について ―マーラーの人間性とその作品との関連について―
 松前紀男 F. Couperin のクラヴサン曲について
 美濃口ちさと American Negro Folk-song ―第一部 (Negro Spiritual)―
 山田ゆり ロマン派への考察とブラームスの存在意義

森井恵美子 象徴としての芸術創造 ―象徴に於ける作品・人間・神―

間・神一

【昭和二十九年年度】

- 小林道夫 Mozart の “Haydn” 四重奏曲について ―Haydn の “Russia” 四重奏曲との比較研究―
 柿木吾郎 笙の楽器史的考察
 安藤由典 音楽の表出性に関する心理学的試み ―明るさと Pitch の Intermodality に関する実験的研究―
 岡 敦子 セザール・フランクの近代フランス音楽に於ける位置とその音楽に対する一考察
 多田逸郎 ブラームスの歌曲に就いて
 淡中淑子 序曲の研究
 上田恵子 シューベルトの歌曲
 大北節子 標題樂的作品と標題音楽について
 小野田敬子 様式成立に関する諸問題 ―様式成立論の為の方法論的基礎考察―
 阿部仁志 オリヴィエ・メシアン作曲学的研究
 倉橋慶子 ドイツロマン派のピアノ協奏曲
 高瀬鞠子 L・v・ベートーヴェン プロメテウス主題
 田中真智子 リヒャルト・シュトラウスの交響詩
 中川弘一郎 音楽批評の方法
 永井節子 ヴァンサン・ダンディーとフランス山人の歌による交響曲

橋本澄子

ローベルト・フランツのリードに就いて

羽金マサヨ

ヴァイオリン・ソナタと二重奏の問題（コレリウプ

ラームス）

藤居恭子

ロシヤ民謡

星野芳子

ショパンのプレリユード作品二八の様式的研究

細谷 禊

ダヴィデ王

山本民子

ベートーヴェンのシンフォニーに於けるスケルツォ

楽章の意義

【昭和三十年度】

安達幸子

ゲーテと音楽

有海喜巳夫

日本民謡の基本的音組織とその発展段階

井上一清

パレストリーナのミサ曲

大坪基代

ネーデルランド楽派のパロディ・ミサに就いて

加藤芳枝

音楽の類型学的研究 ―ダンケルトの方法のショパ

ンへの適用―

鈴木志保子

ドメニコ・スカルラッティのソナタ

木谷和子

バルトークの「ミクロコスモス」 ―拡大された調

性を主として―

佐藤弘子

モーツァルトのピアノ協奏曲について

清水紀子

シューベルトの歌曲について

清水谷明子

バロック時代のドイツに於けるクラヴィア音楽に就

いて

白砂昭一

西洋音楽に於ける調律の史的考察

神保洋子

プロコフィエフの「アレクサンドル・ネフスキー」

―社会主義リアリズムに関する一試論―

鈴木純子

演奏に関する美学的考察

鈴木みどり

「マリアの生涯」研究

平 効子

マッテゾン研究序説

武谷安子

音楽に於ける対照感発生歴史的考察

田中 操

アルベニスのイベリア組曲について

谷口共子

ブラームスのリート ―その楽曲論的分析―

貫 行子

調性の成立過程 ―ルネッサンスよりロココに至る

和声法の変遷―

服部憲治

雅楽管絃曲の楽式

服部七重

現代音楽の精神的根柢

藤井淑子

ハイドンのザロモン交響曲 ―歴史的、分析的研

究―

古井 清

バッハの二声インヴェンション ―B. Boekelmann

のアナリーゼを中心として―

前沢多満

「ヴォツェック」研究 ―社会思想の反映について―

渡部恵一郎

J・S・バッハに至る迄のフーガ

【昭和三十一年度】

伊藤千穂

Mozart の Piano 協奏曲について

上原栄子

盲人と音楽に関する諸問題

北川靖子

J.S. Bach の作品のリズムとテンポ ―Rothschild

の研究の吟味―

鞍掛昭二

日本歌曲の配語法に就いて

桜田章子

ベートーヴェンの第三交響曲（エロイカ）に現れた時代性

清水美知子

Bartók の弦楽四重奏曲の技法的研究

鈴木文代

Mozart の Singspiel の歴史的 position

角倉 一朗

「フーガの技法」とその構造について

瀬野マリ子

Bach の作品演奏の Tempo の変遷と Bach 観の変遷との関係 ―平均率 Klavier 曲集第一巻を例として―

東川清一

バッハの教会カンタータに於ける Choralbearbeitung と Choralbearbeitung の歴史的概観

徳永隆男

クラヴィア変奏曲の歴史的考察

淡中倭子

ベートーヴェンのピアノソナタ

中津川知子

ボロブドゥール仏蹟に現われたる楽器資料 ―インドとの関係並びに東南アジアに於ける位置―

中宮美智子

明治時代に於ける音楽教育の誕生

原 香代子

Thomas Luis de Victoria ―作曲技法及び精神的背景―

古川 房子

ハイドンの弦楽四重奏曲 ―OP. 33 に至るソナタ形式成立過程の研究―

星 野 弘

B. Bartók の弦楽四重奏曲に於ける Hungary 農民音楽の影響

堀 純

Schütz 研究試論

馬淵多恵子

音楽の本質に就て ―存在と表現に関する現象学的

試論―

三宅和子

スペイン民謡について ―Felipe Pedrell の民謡研究に関する考察―

山本寿美子

ハープ史考 ―古代オリエントから中世ヨーロッパまで―

渡部靖子

ワグナーの半音階主義より、シェーンベルクの十二音技法確立に至る発展過程

【昭和三十二年度】

伊豆山礼子

ベートーヴェンの交響曲（動機操作）
シューマンのリード ―シューベルトとの比較に於ける楽究―

伊能由美子

ハイドンの最初期の弦楽四重奏曲の歴史的考察

岩井宏之

―作品一、二、三番を中心として―

大森恵子

音楽才能と訓練
音楽の存在論的分析

沖野節子

音楽の存在論的分析
バッハに至るトッカータの歴史

岡 雅子

H. Schütz の Polychorie 技法の研究

亀井澄子

Gustav Mahler に関する一つの考察

河田 怜子

Scheidt と Bach のコラールにおける施法的和声の比較研究

楠山 明子

能音楽におけるリズムとテンポについて
音楽的発達に関する三つの研究

黒川千里

Debussy に於ける伝統的要素について

佐伯恭子

寺田美代子

西尾直美 オペラにおけるドラマと音楽の結合の問題について

鴫田信男 モンテヴェルディのポツペアの戴冠について

不破悦子 G. Becking のリズム理論に関する研究

前 和男 音楽鑑賞反応の実験心理学的研究 ― 精神電流反応

(PCR) を中心にして―

正木光江 Monteverdi のマドリガル研究

野秋多恵子 グレゴリオ聖歌の樂式論的研究の基礎

矢部公啓 モツアルトの初期の交響曲

渡辺 龍 リューベックの音楽史

亘理矜子 ドイツ初期浪漫派音楽についての一考察 ― 「無限

性」を中心として―

【昭和三十三年度】

青山道子 クラヴィコード、ハープシコードのための音楽から

ピアノ音楽への様式的変遷 ― C.P.E. Bach のク

ラヴィア作品を中心として―

在田靖子 J.S. Bach のオルガンのための „Preludium und

Fuge“

今城千代子 ラヴェルのピアノ曲研究 ― その古典性と近代性―

上田聖子 Hugo Wolf のリートについて

榎並敬子 Schöberg に於ける十二音技法の成立過程

小川澄子 エリザベス朝に於けるヴァージナル音楽

小野陽子 ベートーヴェンの変奏曲 ― ディアベリ変奏曲を中

心として―

神田整子 五音音階の分類

木田真弓 西域楽器の研究

小林達子 Beethoven の後期絃楽四重奏曲の美学的研究

― 対照に就いての一考察

合奏協奏曲 ― イタリアに於けるその歴史―

調性感の成立

高野紀子 イタリアにおける室内カンタータの研究

富田宇多子 Igor Stravinsky の〈春の祭典〉のリズム構造につ

いて

発声的に見た幼児における自然発生的音組織の形成

インド古典歌曲に於る樂式と形式

伯田典子 Pergolesi 研究 ― Pergolesi のトリオソナタの歴

史的位置―

逸見邦子 F. Schubert の Sonata form に関する一考察

― Therstappen の試みた Analyse をもととして―

マンハイム楽派の交響曲に於ける樂器法について

アフリカ音楽のリズムについて

堀田 昭 十六世紀に至るリュートのアジア及びヨーロッパに

於ける起源について

思惟としてのラーガーとその歴史

Frescobaldi の鍵盤作品研究

山崎好子 バッハのクラヴィール曲演奏上の諸問題

山田 貢 十七、十八世紀の音楽における裝飾音

山根俊男 宗教改革時代のコラール ― 民謡との関係を中心と

してー

湯本 秀子 Richard Wagner の作品に於ける様式の研究

【昭和三十四年度】

赤羽由規子 第二次ウィーン楽派研究 ―調性の崩壊とその後に確立されたもの―

岡 晴美 Karnatic 音楽のターラ研究 ―インド音楽のリズムへの一考察―

小野口和子 Webern の音楽におけるセリーと時間

加藤公康 バッハのコラール・プレリユードのスタイル

金子典子 C・P・E・バッハに至るまでのソナタ形式の諸考察

蒲生郷昭 長唄の旋律法の研究

川野節子 B. Bartók のピアノ曲にあらわれた民族性

北川久美子 音楽と社会との相互関連について ―オラトリオによる実証的研究の試み―

笹原良子 二十世紀に於ける調性感について

佐沢弘子 イザークの世俗曲研究

下村康夫 ロマン主義に就いての一考察 ―シューマンに於けるロマン的なもの―

高木 緑 Wagner の“トリスタンとイゾルデ”に於ける内面的な思想の研究

太宰 径子 初期ポリフォニー・ミサ曲の歴史

田中 郁子 演奏に於ける解釈の問題

長沢 文子 F. Schubert の Lied に於ける Recitativo 的要素について

平出佐登子 セザール・フランクの循環主題法について

松岡 淑子 オリヴェ・メシアン作品研究

松島 玲子 オークストラ組曲における多楽章構成の成立

山岡 玲子 ブラームスとその交響曲

山田 和子 R. Schumann のピアノ作品とその技法

山本富士江 ピアノソナタを通してみたハイドンとモーツァルト

【昭和三十五年度】

臼井 英男 ヴェルディのオペラヘオテロンの演出

紙谷 雅子 Debussy のピアノ音楽における印象主義的技法

塩見千枝子 アントン・ヴェーベルン ―抽象構成の美学―

島田外志夫 音楽美の Platon 的理論及び Musike の理念 Schumann に於ける Jean Paul 的フモール

高橋 従子 ―パピヨンについて―

田中 晶子 中世イギリスの多声楽 一三九九―一四五三

柘植 元一 謡曲の音組織

戸島美喜夫 オブジェ・ソノールの成立

長廣比登志 インド音楽理論と思想的背景

中村みづほ ロマネスク音楽の様式史的精神史的研究

萩森 芳子 初期鍵盤音楽の歴史

日高 詢子 ミハエル・ハイドン

深尾江美子 ストラヴィンスキー現象における現代の律動と歴史

的周期性

水野修孝 十二音技法の研究 ―音理論を中心にした作曲学的考察―

宮川陸男 後期バロック時代の器楽コンチェルト

村上賢江 ソナタ形式と「古典性」 ―ハイドンにおける弦楽四重奏曲をめぐって―

山本文茂 “Dido and Aeneas” の劇作法

吉田英子 フランドル楽派のモテト研究 ―ジョスカン・デ・ブレを中心に―

吉村妙子 音楽におけるリズムの生命哲学的考察

吉村康子 東アジアにおけるチター属楽器について

【昭和三十六年度】

小杉武久 音楽における即興性 ―比較音楽学的考察―

大西友信 ベートーヴェンの器楽におけるフーガ

加田萬里子 ブラームスに於ける楽節構造の研究

北原克子 音楽と人間形成の問題

武田明倫 ミュージック・セリエルの作曲学的美学的考察

―その誕生から偶然性の導入迄―

田村正明 ロマン派の文学と音楽と ―その比較研究―

立田和美 ドイツに於けるオルガン運動 ―二十世紀における

バロックオルガンの意義―

小島美子 滝廉太郎から橋本国彦までの歌曲

服部長子 初期の Generalbass 研究

服部美芳

ドビュッシーの「ペレアスとメリザンド」 ―音組織とライトモチーフについて―

水村浩一

フルート音の音響学的研究

八束美智子

雅楽管絃の曲に於ける箏と琵琶の機能について

山野誠之

Arthur Honegger 論 ―初期の交響的作品について―

渡辺愛子

民謡を素材とする Bartók の作品研究

【昭和三十七年度】

安孫子真美子 バッハの受難曲についての研究 ―主としてマタイ

伝受難曲を中心に―

阿部摩耶

Johann Stamitz の器楽作品

石垣怜子

ブルックナーの交響曲におけるデュナミクの研究

稲葉紀子

Gustav Mahler に関する一考察 ―Mahler の民衆性について―

今井月子

アラビア音楽におけるリズムの研究

久野寿彦

ペルシャ音楽に於けるアーヴァーズの旋律法

佐野光司

ロマン派における和声の変遷

清水京子

《後宮からの誘拐》を通してみたモーツァルト

辻 フサ

アルテュール・オネゲル論

長坂紀久子

Jean-Jacques Rousseau の音楽思想

花田やすゑ

セルゲイ・プロコフィエフ ―その音楽語法の変遷―

松永 建

和音に対する反応の研究 ―音楽行動の発達の原初

構造の究明のために―

水原冬美 Gesualdo di Venosa の Madrigals

吉川浩子 アルマンド ―その様式化の過程について―

角 知子 音楽の美学的研究についての反省

森田 稔 十八世紀に出版された二つのロシア民謡集

松村 頴子 ドビュッシーの前奏曲集(第一集・第二集) について

【昭和三十八年度】

赤木 興人 ベートーヴェンのピアノ・ソナタ op. 78 (Fis-dur)

の意義

植田 義子 J.S. Bach に至る迄のトッカータの変遷

浦崎 璋子 八重山の音楽

戎谷 公子 糸竹初心集所載の小唄の復原について

金子 篤夫 変奏の原理

川上 迪子 H. Wolf の歌曲について

草野 妙子 箏組歌の音楽的性情 ―箏組歌の手(箏の技法)と

うたの関係について―

小柴はるみ 追分様式のリズム―日本民謡の自由リズム

斉藤 紀子 ドボルジャークの弦楽四重奏曲「アメリカ」における

民族性 ―層構造論による検討―

高橋 隆二 民族音楽学のための基礎資料

田中 信子 音楽家ルソー論のための一試論

月溪 詢子 フランクの音楽について

富 重 潮

原田 宏司 Carl Philipp Emanuel Bach のクラヴィア作品

樋口 紀 プレトリウスのシンタグマ・ムジクムを通してみた

彼の協奏曲

船山 隆 「春の祭典」の時間論的解明の試み

松谷 二葉 アメリカ・ニグロの音楽 ―黒人霊歌を中心に―

山田 弘子 下座音楽の特性についての一考察 ―主として R.

Wagner の指導動機と比較して―

【昭和三十九年度】

荒川 恒子 リコーダーとその音楽

大津 恒子 ドイツ・プロテスタント受難曲の歴史

大場 俊一 ブクステフーデのカンタータ

梶川 信子 京劇の楽式 ―「板眼」の特性―

坂田 章子 ワーグナーの楽劇論

佐藤 征子 ベートーヴェンの作品における多声的な要素につい

て

高島 万智子 W.A. Mozart "Le Nozze di Figaro" に至るまで

のイタリア・オペラの歴史 ―主にオペラ・ブッフ

アを中心として―

能の〈翁〉と歌舞伎の三番叟もの

半谷 宣子 光崎検校とその作品

星 旭 音楽における時間の概念について

本 田 脩 Ch. Batteux の音楽模倣論について

増 田 忍

三上文子

グレゴリオ聖歌のリズムの古文書学的研究

— J.W.A. Vollaerts に基づく一考察 —

三戸 繁

アウグスティヌスの《音楽論》によつて考えたこと

村井靖児

「日本伝統音楽の旋律法の研究」 — 民俗的段階における旋律法 —

八代逸子

音楽における「バロック」概念の再検討

万木治子

ショパンのマズルカについて

【昭和四十年年度】

稲田浩子

モーツァルトの《魔笛》に至るジングシュピール

内野允子

ケルビーニの研究

大貫紀子

地歌『手事』の楽曲構成

岸本宏子

ジェスアルドの音楽とその背景、五声マドリガールを中心

金田一美津子

雅楽管絃における渡物の研究

窪田静子

J.S. Bach から Mozart に至るまでの Klavierkonzert の変遷

小林 緑

モーツァルトの絃楽五重奏曲研究

笹淵恭子

Anton Webern の音楽創造論 — 音素材の問題 —

寺田兼文

音楽美学の方法論に関する一反省 — 音楽的時間論を通して —

藤岡啓子

ヴィヴァルディのソロ・コンチェルト

藤沢紀子

W.A. Mozart のピアノの Klaversonate

松崎由美子

E. Ansermet の音楽美学

松下壽子

ショパンにおけるロマン的なもの — とくに、プ

レリユードに基づく美学的考察 —

松尾晴子

エリック・サティ論

水野信男

ユダヤ音楽における古代的諸要素について — 主として宗教歌による実証的研究の試み —

【昭和四十一年度】

新谷真理子

東京に於ける祭囃子の音楽的研究

石原笙子

ベトナム民謡の旋律的特徴 — 音階構造を基にして —

加島怜子

十七世紀ドイツのオルガン・コラール

軽部洋子

十八世紀の旋律論

河崎郁子

Friedrich von Hausegger の音楽美学思想

北上泰子

能楽のアシライ吹きについて — その定性的研究方法 —

小島千鶴子

シェイクスピアと音楽

佐々木順子

古典組曲の様式史的研究 — 特に J.S. Bach のクラヴィーア組曲を中心に —

佐藤久美子

津軽民謡における三味線の音楽的研究 — 津軽じょ

神保恵子

んがら節を中心として —

須貝静直

Missa L'homme armé

谷 慶郎

Madrigale における Lasso 様式

月溪恒子

尺八古典本曲の研究 — 主として「三虚霊」の音楽

構造について―

水田 堯

初期シェーンベルク作品における語法と形式

―Op. 4とOp. 15を中心として―

和田菊江
土屋英二

ベートーヴェンとの比較によるその宗教性―

ヘンデル・オラトリオの研究

ブランデンブルク協奏曲 ―トウツティの様態とその展開―

【昭和四十二年度】

石谷冽子

礼拝における音楽の現状 ―アングリカン・チャーチの立場を中心に―

伊藤淑子

ヘンリー・パーセルのアンセム研究

海老原直秀

ドビュッシーのピアノ曲研究

川崎 操

ニコラ・ヴィチエンティノ ―ルネッサンスのクロマティシズム論―

河端宏子

バッハのカンタータにおけるパロディ

栗原雪代

弾詞について ―中国語り物としての弾詞―

斉藤ますみ

アレクサンダー・スクリャービンのピアノ作品の楽曲構造について ―十曲のソナタを中心に―

新堀真知子

十八世紀における即興演奏 ―特に通奏低音を中心に―

千葉七七子

フーゴー・ヴォルフのリートの研究 ―ゲーテの詩による歌曲集を中心として―

中村京子

清元節の音楽的特色

平田洋子

ハイドンの初期の交響曲

水野しのぶ

ヨーゼフ・ハイドンのディヴェルティメントの研究

諸井満恵

ボリス・ゴドノフ研究

吉岡容子

ブルックナーのミサ曲 ―J・S・バッハとL・v・

【昭和四十三年度】

青木典子

ジャン・フィリップ・ラモーのクラヴサン曲研究

小川康子

J. Schubert の室内楽曲研究

小沢房子

J. S. Bach のチェンバロ協奏曲について

金子治子

音楽的知覚に関する美学的考察

加納民夫

ヴァーグナーの「ニーベルングの指輪」

木村楨子

マックス・レーガーにおける調性構造

肥田喜代子

ガブリエル・フォーレの和声

近藤由喜子

山田検校の作品研究

鈴木由美子

J・S・バッハのオルガン・フーガ

高市真知子

初期プロテスタントのコラール ―ルターの生前出版の三つの歌曲集の比較検討を中心として―

錦 香

ドビュッシーの歌曲研究 ―詩のもつリズムの扱い方について―

樋口 昭

初期かぶき音楽 ―誕生かぶきのかぶき歌謡を中心とする民俗音楽学的研究―

堀 英彦

プロテスタント教会のコラール

村原京子

ヘンデル・オペラの研究 ―アリアにおけるアフエクト表現を中心に―

【昭和四十四年度】

相川美千代 ブラームスの「十一」のコーラル前奏曲集 作品一二

二〇

足立美比古 音楽体験の現象学

石井信子 「サロメ」研究

石田ちづる シュッツのクライネ・ガイストリッヒエ・コンツェルテの楽曲研究

井上美奈子 シェーンベルクのオペラ《モーゼとアロン》

―主としてその十二音列の用法について―

江塚美子 フリーデマン・バッハの器楽作品研究 ―フィグー

ル分析にみる個性―

大津陽子 ビアージョ・マリニーの器楽作品

片岡啓一 ヨハン・ゴットフリート・ヴァルタ研究 ―主とし

てムジカ・ポエティカの観点から―

金子建志 ベートーヴェンの交響曲のオーケストレーションと

現代の演奏

瀧井敬子 A・シェリングの音楽解釈論の研究

田上みどり グラレアヌス、ジョスカン、ヴィーラールト ―十六

世紀の多声楽の一樣相―

原 正幸 音の誕生

水井月子 J・N・フォルケルの「音楽通史」

宮本憲子 十八世紀イタリアのチェンバロとピアノのためのソ

ナタ

鶴岡真佐子 音楽に関するランガーのシンボル論

【昭和四十五年度】

朝妻明敏 ウェーベルンの後期作品の情報理論的分析

天野千佳子 「聞くこと」と表現としての身体

櫻井哲男 民族音楽学の方法論

三浦由紀子 カデンツにみる調性の確立

平田公子 R・インガルデンの「音楽作品の存在論」

宮下照子 G・フレスコバルディの鍵盤作品 ―リチェルカー

レとカンツォーナ―

元吉令子 音楽的学習過程における主観的情報

【昭和四十六年度】

浅岡寿雄 作曲家としてのフェルツチョ・ブゾーニ

泉 健 《音楽作品》概念の再検討

稲田久子 E・T・A・ホフマンについて ―その文学と音楽―

岡村陽子 新時代は黎明に近づけり

笠羽映子 音楽作品の同一性をめぐって

金子静江 民族音楽学と言語学 ―チャールズ・シーガーの論

文を中心として―

小林幸男 ハンガリー音楽とコダーイの音楽教育観

斎藤 茂 現代西洋音楽への一考察

高瀬まり子 音楽の発生と呪術性について

中山孝史 シューマンの初期のピアノ作品 ―主として旋律形

態の考察―

藤井文恵

ヘンデルのオラトリオ研究

安田啓子

モンテヴェルディのマドリガル

【昭和四十七年度】

安藤真理子

前奏曲集におけるドビュッシーの音楽語法

大来治子

十七世紀ヴェネツィアにおけるオペラ ―音楽社会学的研究―

金本正武

J. Stamitz のシンフォニーについて

川瀬康子

シャーマニズムと音楽

佐藤実佐子

雅楽の唄いものの旋律

須藤敬子

ヴィヴァルディのコンチェルトの形式について

関根和江

ベートーヴェンの弦楽四重奏曲におけるソナタ形式の研究 ―展開部を中心に―

滝澤達子

アラビア音楽の周辺 ―アル・ファラービーの音楽論を中心として―

寺島由紀子

J・ブラームスの変奏曲

平岡みちる

十八世紀フランス・オペラの一側面 ―ブフォン論争―

松橋麻利

「ペレアスとメリザンド」からみたC・ドビュッシーの音楽

茂手木潔子

囃子における篠笛の音楽的考察 ―東京の祭囃子を中心として―

【昭和四十八年度】

岡田真紀

歌謡曲にみる大衆の音楽的嗜好の変遷

片桐 功

比較音楽学の方法論

小林いづみ

能の謡の研究 ―曲種による音楽的差異―

生野幸子

ブクステフーデのトッカータ

高野 茂

グスタフ・マーラーの交響曲への手引

多田晴美

ルートヴィヒ・ゼンフルのリート研究

龍村あや子

リズム ―音楽の存在状態に関する社会・民族音楽学的考察―

福井陽子

フロットラ ―その詩と音楽―

本田あけみ

フーガのテーマ ―リズム的メトリズムの観点からの考察―

諸橋雪子

ストラヴィンスキーの十二音技法による作品

吉田和子

ダングルベール ―生涯と作品、そして組曲の形成期―

【昭和四十九年度】

塚田健一

音楽における実存

栗倉宏子

オクトエコスについて ―その起源の背景―

川上 晃

夜の音楽 ―ベートーベンのピアノソナタ op.110 に―

種瀬陽子

タイ国の仏教音楽研究

内藤祐紀子

フーゴ・ヴォルフのリート ―詩と音楽の関係―

永治智恵子

義太夫節における地合の研究 ―『鮎屋の段』を中

心として―

鳴坂公江 舞踊記譜の試み ―音楽と舞踊の関係を探り出すために―

山田 純 フォーレのために

【昭和五十年度】

田村史子 中部ジャワのガムラン音楽

森川幸枝 J・A・シャイベと啓蒙主義時代 ―『批判的音楽家』にみる―

山上博史 ナッシング・バット・ザ・ブルース

伊藤由美子 エドガー・ヴァレーズ研究

浦本裕子 グシェについての一つの試論

梶山千絵子 ヨアヒム・ブルマイスターのフィグーレンレーレによるラツソのモテト分析の試み

後藤多恵子 シューマンの《詩人の恋》における詩と音楽

坂崎 紀 トマス・ルイス・デ・ビクトリアの宗教合唱曲

佐藤みどり ミュージック・コンクレートの歴史と意味

末綱和子 十九世紀末の作曲家としてのドビュッシーとマラー

高木則子 アダム・クリーガーの《Neue Arien》研究

高橋信一 古代ギリシアにおけるムシケーの始まり

土屋啓子 音楽における引用の美学的基礎

西原 稔 音楽美の根源 ―ハイデガーを出発点として―

橋本和子 表現主義試論 ―十二音技法をめぐって―

増山賢治 京劇の唱腔の研究

山縣敬子 狂言の謡 ―主として『狂言ノリ』の謡について―

山口博子 ヴェルディにおける音楽と劇の一致 ―《オテロ》を中心として―

【昭和五十一年度】

安藤 博 F・シューベルトのソナタ形式の研究

青柳謙二 ヘーゲル美学と音楽の小研究

磯部知子 舞曲と「舞曲的なもの」 ―J・S・バッハに至る迄の歴史を中心として―

今井民子 ロカテルリ作品三《L'Arte del Violino》のカプリスについて

小澤和子 伯林から蘇格蘭への歴史 ―F・メンデルスゾーン

の交響曲について―

金城 厚 沖縄諸島の神歌 ―その音楽芸能史的研究―

木之下博子 日本民謡のリズム構造 ―言語的側面から―

越谷純子 ベリオにおける《音楽言語》

谷保温子 エリック・サティ研究 ―《家具の音楽》を中心として―

土田英三郎 ブルックナーの交響曲における形式原理

西川留美子 ロベルト・シューマンの評論活動 ―その音楽観及

び作品との関連―

橋本久美子 生きることへの問いかけ ―音楽探究への一つの歩

みとして―

【昭和五十二年度】

柴田 俊一 現代日本の音楽状況批判 ―アルテュール・オネゲ

ルの音楽評論を契機として―

秀村 冠一 「ドイツ・レクイエム」の研究

森 泰彦 モーツァルトの交響曲の全主題目録 ―モーツァル

トの作品研究の方法の探究―

大竹 知至 ビルマ音楽概論

亀山 夏子 J・S・バッハの《ヴァイオリンとチェンバロのた

めの六つのソナタ》(BWV 1014~1019) についで

久保田慶一 ヴィーン古典派の器楽曲に於けるフーガ技法

小石川和代 ヨハネス・ブラームスの交響曲におけるリズム原理

斉藤 律子 筑豊炭鉱社会の音楽

高橋 美都 寺院における舞楽の伝統と生命力 ―摂州四天王寺

聖霊会舞楽を中心に―

高間 亮子 早坂文雄研究

中山由美子 レナード・B・メイヤー研究

益山 典子 バルトーク研究 ―三つの舞台作品より―

【昭和五十三年度】

大塚 拝子 近世邦楽における転調

竹之内有美子 プシンデンの技法

田辺 史郎 八橋十三組の研究

萩原いづみ 能に至る「鼓」の変遷 ―主として囃子の機能か

石橋 洋子

フランツ・リストのピアノ演奏技巧 ―超絶技巧練

井上さつき

習曲の三つの版を中心に―

井口 真弓

ベルリオーズの交響曲における様式

大橋 悦子

J・S・バッハのチェンバロ曲への編曲技法

ジョン・ブル研究

―十六曲のファンタジアの分析を通して―

白坂 裕子

ゲーテの『ファウスト』と音楽家たち

杉浦 晃

ジャズ・イデオム研究

竹内 秀

第二交響曲論 ―G・マーラーの《復活》につい

て―

津田 明子

スペイン民謡ロマンセについて

鳥越けい子

マリ―・シェイファー研究

【昭和五十四年度】

関 美知雄 J・S・バッハのオルガン・コラールの形式

大橋 昭子 音楽的リズムに関する試論 ―オリヴィエ・メシア

ンのリズム構造をとりあげて―

桑沢 清志 音楽批評の考察 ―新聞批評をめぐって―

長野 俊樹 バルトークの弦楽四重奏曲 ―その構造と意味―

空野 育子 J・S・バッハのフルート・ソナタ研究

青井 裕美 音楽記号学序論 ―その現状と展望―

蘆川 美保 ピアノ奏法の歴史的考察

天野 直子 アラビア中世の音楽観 ―音楽の是非を中心とし

て―

石田 式子

インド民謡の拍節構造と伴奏太鼓のリズム型

木村 護

音楽における絶対価値 ―社会学主義に基づく試論―

郡司希志子

映画音楽 ―映画における聴覚層の研究―

今川 恭子

ヴィンコ・グロボカール研究 ―音楽におけるコミユニケーション論の試み―

芹澤 薫

カラウイタンの構造

田中 敬子

アフリカ音楽研究 ―中央アフリカを中心に―

中島 治美

ラッソーのモテトに於けるオステイナートの技巧と楽曲構造の問題

中分京子

《聖セバスティアンの殉教》について

服部 夏実

明治前期の長唄研究

藤岡由美子

プロコフィエフのピアノ・ソナタ研究

増田美恵子

コーカーの音楽意味論に関する一考察 ―音楽の身振りをめぐって―

【昭和五十五年度】

倉茂 紀子

カントの音楽論

佐野 靖

シューマンにおける詩と音楽の結びつき ―《リ―

ダークライス》作品三九―

村上 圭子

日本におけるピアノ教材について ―わらべ歌を素材とする、日本人の編曲・作曲によるピアノ教材の

分析研究―

井上 貴子

ロック・ドラッグ・宗教、その精神上の関係について

鵜野 真理

ブルースと宗教音楽 ―第二次世界大戦前のレコードによる比較研究―

大島 圭子

音楽象徴論について

大西紀代子

チャールズ・E・アイヴズ研究

熊本 和子

音楽的知覚に関する研究 ―ロベール・フランセの著作を中心に―

黒木亜美子

米良神楽の音楽 ―狩猟文化圏の神楽の一例―

木幡アユ子

雅楽における唱歌について ―龍笛の旋律と唱歌の分析を中心に―

佐藤 文恵

現代の聴衆 ―音楽一般に関するアンケート調査をもとに―

白石 美雪

ジョン・ケージ研究

武久 源造

十六世紀西洋音楽における変化の諸層 ―受難曲を中心に―

立神 粧子

《子供と魔法》におけるラヴェルの創造性 ―オーケストレーションと抒情性―

田村 真理子

歌謡曲における和声

永岡 都

シェーンベルクにおける表現主義 ―《ゲオルゲ歌曲》と《ピエロ・リュネール》を中心に―

檜崎 洋子

日本の弦楽四重奏曲 ―一九六〇年代の作品を中心に―

花岡 英里

カタロニア民謡について

原 明 美

ロベルト・シューマンのピアノ作品における音楽と文学 ―《クライスレリアーナ》Op.16を中心に―

古山 裕 子

ピアノにおけるアーティキュレーションについて

水谷知都子

ベッリーニの《ノルマ》における旋律の特徴

宮丸直子

鳴り物の研究 ―長唄の楽曲にそって―

【昭和五十六年度】

稲岡敬三

プラトンの音楽観

小川一彦

古典派のギター室内楽

皆川厚一

集団即興演奏における非言語的コミュニケーションの様相

伊丹比呂子

トルコのマカームについて

伊東晶子

シャルル・カミーユ・サン＝サーンス研究 ―その楽曲形式を中心に―

川 船 緑

ヴィヴァルディの官能的音響の世界 ―実際の演奏に基づく考察―

野田 宏 人

ヨルバ族とその音楽

大田 敦 子

オッフエンバック研究 ―芸術音楽と大衆音楽の接点―

小川 伊 作

フランス十七世紀初頭のリュート音楽

小川 和 香

ウィリアム・バード研究序説

恩地 元 子

クロード・ドビュッシーにおける〈詩〉と〈音楽〉

―《ベリティスの歌》をめぐって―

木村直子

創造的環境音楽研究

小島 裕 子

A・スクリャービンの和声分析の一つの試み

下木奈保子

―V・デルノヴァの方法による―

田中 康 子

グスタフ・マーラーの音楽思想についての一考察

田村 治 美

幕末期における洋楽享受の様態 ―軍楽の輸入と受容をめぐって―

O・メシアン

の音楽の普遍性 ―色彩表現としての構造と美学―

野村 定 子

J・ケージの音楽思想における禪

林 美穂子

地歌箏曲の合奏の研究 ―三絃二挺の合奏を中心として―

松野 和 恵

唱歌教育から音楽教育への途上における大正期の位置づけ

宮崎 理 子

J.S.Bachの半音階法 ―ケーテンとライプツヒ

森 芳 子

時代の鍵盤曲を中心に―

矢向 正 人

音楽の理解 ―ペーター・ファルテンの論文をめぐって―

山本 敦 子

長唄三味線の旋律構造における多層的分節法とその音楽記号学的拡大 ―音楽記号学から見た長唄―

クラヴィコード、チェンバロのための音楽からピアノのための音楽への様式的変遷

【昭和五十七年度】

大倉 文 雄

ツィンマーマンのオペラ《兵士たち》研究

岡田龍之介

J・C・バッハの二つのクラヴィーア・ソナタ集

多久涼子 バッハにおけるフーガ研究

田中美加 陰囃子の研究

秋山智子 民族音楽字の方法論 ―形式分析の研究―

浅井香織 P・ブーレーズ ―或いは〈archi-écriture〉の音楽

大越美由紀 「降誕」のテーマをめぐるバッハとヘンデル ―パロ

ディを通しての一考察―

大角欣矢 フロットラの様式に関する研究

小沢優子 バロック・コンチェルト研究 ―リトルネロ形式を

中心に―

尾前文子 シューベルトのリートにおける伴奏類型 ―ヘポエ

ジーン探究の窓口として―

木村佳代 日本の子守歌

木村麻里子 フランス近代の和声法と調性 ―ピアノ曲を中心

に―

妻藤晶子 バッハとヘンデルの合唱フーガ

坂尾康子 バリ舞踊劇アルジャの研究

笹野浩樹 トルコの軍楽について

椎名陽子 近代舞踊革命前後の舞踊 ―美学的見地からの史的

考察―

竹内恭子 ポピュラー音楽編曲法

長友由子 録音技術の発展と音楽

催馬楽復元研究序論 ―呂歌を中心に―

林 美保 J.M. Hauer の音楽理論 ―Trove を中心とした

考察―

東 暁子 台湾在住客家人の民謡の研究

日野利恵 ブゾーニのバッハ解釈 ―バッハ受容史の一側面と

しての―

三浦裕子 能に於ける舞の囃子の研究 ―室町末期を中心に―

山田敦子 南インドのダンスドラマ ―カタカリ―

【昭和五十八年度】

田中悠美子 義太夫節の旋律型

大橋マリ 音楽のイコノグラフィ―その方法と可能性―

川西真理 ステイプ・ライヒ研究 ―漸次的変化のプロセス

としての音楽―

白井真由美 祭り囃子の研究 ―神奈川県三浦半島の例を中心と

して―

難波正明 シェーンベルクによる無調性

渡辺敏晴 イタリア・ルネサンスにおける音楽のアイデア

荒井恵理子 エリック・サティ研究 ―サティとヘューモアの

思想―

稲垣奈穂子 童謡運動の衰退について

小倉眞理 日本におけるクロード・ドビュッシーの受容史

―第二次世界大戦以前―

岸並由希子 ディアギレフと音楽

鴻巣 香 めりやす考

佐藤法子 正信偈―念仏―和讃―回向の浄土真宗各派に於ける

比較研究

相馬久子

わが国における音楽教育の社会学的研究に向けて

田代佳奈子

パウル・ヒンデミット研究 ―調性感を中心に―

田名部久美

教会施法の理論と実際 ―聖務日課の詩篇唱をめぐって―

土田若子

シューベルトの後期作品群におけるソナタ形式

堤 ゆり

現代における笙の演奏 ―音色の問題を中心に―

寺内直子

雅楽における楽器法の変遷 ―打楽器を中心として―

牧野宏美

クロンチヨン研究序論

溝尻雅子

音楽の価値について ―ストラヴィンスキーの場合―

宮下 薫

ディズニー作品における音楽

横井直行

音楽における心的契機をめぐって

【昭和五十九年度】

漆崎まり

半太夫節の研究

久万田 晋

小泉音階理論研究

水尾玲実

テレビにおけるCM音楽

石内貴子

ラモールの楽器法研究 ―《イポリトとアリシー》について―

岩田遵子

シューマンのピアノ音楽におけるジャン・パウルの影響

植村幸生

宮古諸島のクイチャー

大宅 緒

ドビュッシーと象徴主義 ―純粋音響確立への歩

みー

風流踊歌の研究 ―中世から近世への音楽変化―

中部ジャワのガムランにおけるパトゥツ

シベリウス研究 ―交響詩を中心に―

一九五一年から一九七〇年の日本の現代作品研究

―伝統と民族性の問題を中心に―

津軽三味線の〈三つ物〉における比較研究 ―曲弾

きを中心として―

シューマンの室内楽

ガブリエル・フォーレの後期作品における和声様式

ギヨーム・ド・マシヨール研究 ―彼のモテットをめぐって―

くつてー

ショスタコーヴィチ研究 ―弦楽四重奏曲第十二番

を中心として―

今様研究 ―現存楽譜を手立てに―

音楽教育における普遍的概念についての考察

ガブリエル・フォーレの歌曲に関する研究 ―ドビ

ュッシーとの比較による―

F・クープランの〈ヘオルドル〉研究

音楽教育についての音楽哲学からの一考察 ―B.

Reimer, A Philosophy of Music Education をこ

とぐちとして―

ロシア・アヴァンギャルド音楽研究序論 ―アルト

ウール・ルリエを中心に―

吉田 菊子 ジョージ・クラム研究 ―詩的イメージを核とする音楽―

【昭和六十年年度】

小倉 信宏 モーリス・ラヴェルにおけるソナタ形式 ―〈枠〉構造と仮面性―

吉田 洋 日本のミュージカルにおける音楽的諸問題

福岡 正太 文化・言語・音楽 ―民族音楽学への言語からの接近―

松原 絹枝 フーゴ・ヴォルフの歌曲における詩と音楽 ―ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』よりシューベルト、シューマンとの比較分析を基に―

秋山 徹也 ブライトコプフ主題目録にみる十八世紀後半の音楽界の状況

新井 鷗子 モンテヴェルディのマドリガーレにおける詩と音楽の関係

伊藤 佐保美 浪曲の歴史的考察 ―近代日本の民衆の音楽状況―
井上 恵理 沖縄・多良間島の歌謡

大高 智子 特殊教育（精薄児）における音楽のあり方
加藤 恵 映画における音と映像の関係 ―武満徹の映画音楽を中心に―

小林 恵美 ハイインリヒ・シュッツ研究 ―《Geistliche Chormusik》を中心として―

佐藤 里美 賛美の音楽 ―教会という場における音楽の可能性―

篠原 葉子 性―
シヨスタコヴィチ研究 ―交響曲第十四番「死者の歌」をめぐる―

島影 典子 A・K・リヤードフ研究

島田 さゆり ドビュッシーの音楽形式 ―《牧神の午後への前奏曲》以前―

清水 里恵 M・レーガーのオルガン音楽 ―コラル・ファンタジーを中心に―

鶴田 祐子 R・シューマンのバッハ受容 ―その創作への影響―

中村 聡実 J・ハイドンの弦楽四重奏曲 ―Op.1～Op.33の第一楽章を中心に―

野本 由紀夫 F・リストにおける標題と構成原理の弁証法 ―《ファウスト交響曲》における形式聴―

橋本 佳代子 十八世紀の指揮法

深見 友紀子 音楽情報処理についての脳波学的研究
松野 久美子 ロシア・バレエ団の芸術 ―一九一〇年代を中心に―

渡辺 潤子 ジョージ・ガーシュイン研究 ―《ラプソディ・イン・ブルー》を中心に―

【昭和六十一年年度】

牧野 英一郎 釜鳴り儀礼の研究

飯田 勉 R・シューマンのクラヴィーア・ツィクルス ―そ

の構造的統一を中心に――

柴田篤志 太平洋戦争に至る昭和の洋楽活動 ―組織活動を中心に――

心に――

辻 陽 電子音楽の音響的事象 ―制作過程の分類と記譜とのかかわり――

のかかわり――

有田 栄 L・ペリオの声楽作品における音と言葉 ―「開かれた音楽空間」の探求――

れた音楽空間」の探求――

市川早苗 G・フォーレの歌曲における旋法性

奥 直子 ルイジ・ノーノ研究 ―始源への回帰――

小岩聖子 フランソワ・クープランのトリオソナタ研究

―コレッリの影響を考慮して――

後藤明子 箏曲における「手」と「節」と「歌詞」の関係

―吉沢検校の古今組を探る――

高松章子 イギリス王制復古時代におけるドラマティック・オペラ研究

―十七世紀におけるドラマティック・オペラの成立過程、及び《アーサー王》にみられるその構成原理――

の構成原理――

の構成原理――

竹下晴子 長唄に於ける替手の研究

田辺洋子 ルター時代のコラールの音楽的・社会的考察

中村仁美 花祭の芸態研究 ―主に音楽的側面から――

中村美郁 戦後の音楽教育における日本音楽 ―導入と問題点――

点――

長尾めぐみ 詩と音楽が出会う場 ―賛美歌・賢治・朔太郎――

長岡 英 ルネサンスのオルフェウス ―モンテヴェルディの

《オルフェオ》(二六〇七)まで――

町田さゆり デオダ・ド・セヴラックの人と作品 ―ピアノ曲を中心に――

中心に――

宮重由紀 作曲のエネルギー源について ―強迫人格者と作曲との関係より――

との関係より――

米山まどか 舞踊研究における分析と記録の問題

淀 直美 ヴィオッティの演奏技法 ―ヴァイオリン協奏曲に見られるモダン・ボウの影響について――

見られるモダン・ボウの影響について――

【昭和六十二年度】

青嶋由紀 学校教育における唱法の歴史的研究

稲葉清美 農業研究 ―サムルノリにみる農業の長短の構造――

太田典子 サウンド・システム研究

小川あづさ ソウル音楽における身体行動の意味と働き ―ジェームス・ブラウンを中心に――

―ジェームス・ブラウンを中心に――

浅野美生 ヒンドウスターニー音楽のラーガ研究 ―十七〜十九世紀のラーガマーラー絵画を手がかりに――

―十九世紀のラーガマーラー絵画を手がかりに――

板野あき子 ヘンリー・カウエル研究

今井俊道 中世ヨーロッパの音楽観 ―音響と構造の原理への貢献――

貢献――

小野寺淳子 グスタフ・マーラーの《交響曲第九番》 ―形式原理とその意味――

とその意味――

押切宝子 山田検校の音楽思想研究 ―『山田検校自序楽譜集』序文から――

集』序文から――

(注) (一) 原文ママ

小坂美奈 音楽とパフォーマンス — John Cage から Laurie Anderson に至るまで —

小林美奈 グスタフ・マーラーの中期の交響曲におけるシンメトリカルな構成原理

佐藤 望 J・S・バッハのオルガンに関する楽器学的考察

澁谷政子 コーカスの『音楽と意味』についての批判的研究

末永理恵 ドビュッシーのソナタに見られる晩年の作品の傾向について

住吉紀子 中部ジャワのガムランにおけるラグをめぐる一ガムラン研究の一断面として —

関 尚子 音楽能力 — 天才ピアニストの条件 —

築山弘子 ジョスカンの四声のモテット

中田 一子 東京都世田谷区深沢の音楽文化の変化

平井裕子 現代日本人の音楽意識に関する研究 — 邦楽と洋楽の比較を中心として —

平岡千鶴子 M・カーゲルのインストルメンタール・テアター研究 — 一六〇年代を中心に —

三田友理 オペラ『ヴォツェック』研究

室田尚子 世紀転換期のカヴァレット・シャンソン — 《Brettlieder》を中心に —

山田啓明 十八世紀における福音派宗教音楽の変遷 — C・P・E・バッハとJ・S・バッハのマニフィカート —